

国際ボランティア貯金制度の評価

【現地アンケート結果を中心に】

国際ボランティア貯金制度は、通常郵便貯金の税引き後の受取利子の全部又は一部を、海外民間援助団体（NGO）の活動を通じて、開発途上地域の住民の福祉向上に役立て、国民参加による民間レベルでの海外援助の充実に資するため、平成3年から実施された寄附制度です。平成19年9月末に郵政民営化に伴い廃止され、郵政民営化以降は、郵便貯金・簡易生命保険管理機構が寄附金を継承し、寄附金の配分事業を実施しています。

※本評価は、総務省の平成24年度調査研究として実施された「国際ボランティア貯金制度の評価」に引き続き、配分事業を通じて裨益を受けた現地住民、関係者等へのアンケートを実施し、その結果を中心に制度の評価を行うことを目的として、平成25年度に新日本有限責任監査法人（以下SNCという）によって、平成25年7月～平成26年2月に実施されました。以下はSNCから提出された調査結果報告書をまとめたものです。

1. 平成23年度配分事業の裨益者の声、意見

本年度評価では、平成23年度国際ボランティア貯金の配分を受けた以下の3事業を対象にして、事業の裨益を受けた対象者に対してインタビュー調査を行った

■カンボジア・アジア・レインボー「貧困労働者のための職業訓練校の運営」

アジア・レインボーは、プノンペン市ステンミンチャイ区に職業訓練センター（レインボー職業訓練校）を建設し、日中及び（仕事をしながら学ぶ人を対象に）夜間に、縫製、美容、バイク修理、電化製品修理の職業訓練を行い、生徒の技能を身につけることで職業的な自立を支援している。

○事業が日本（国際ボランティア貯金）からの支援であることの認知度

本校が日本からの支援であることについては、在校生、卒業生ともに全員（29名）が「知っている」と回答した。一方、国際ボランティア貯金からの支援であることについては、21名（72.4%）が知っていると回答した。

○サービスの内容、質に対する評価

授業の内容、質については、非常に的確でかつ分かりやすい授業が実施されており、受講した生徒は確実に技術が身に付くような内容、水準であり、生徒も非常に高い満足度が得られているとの回答であった。また、教員の質についても生徒からの評価は高く、先生のように高い技術を身につけたいと言う生徒が多く、生徒にとって模範、目標となるような存在であるとの回答であった。

○生活環境の改善への期待、卒業後の進路

卒業後の生活環境の改善については、多くの生徒が技術を身につけることで、より良い職業に付けるようになり、また将来的には独立することで、安定的な収入が得られるようになり、生活がより改善すると期待しているようであるとの回答であった。

図表 卒業してバイク修理店を開店した生徒



(卒業生へのインタビュー)

・授業の内容はとても良い。説明が大変分かりやすい。私は6カ月のコースに参加したが、5カ月で一定の技術を習得できたと考えて、卒業し、起業した。工場勤務の時と比べて、労働環境、生活環境は大変良くなった。収入も上がった。工場勤務の時は残業をめいっぱいやって貯金できるのは毎月\$50であったが、今は毎月\$200の貯金ができるようになった。

図表 レインボー職業訓練校卒業生の生活環境の改善状況

クラス	以前	現在
バイク修理	・工場勤務	・バイク修理店開業 ・以前は毎月\$50の貯金であったが、今は毎月\$200を貯金。
縫製	・工場勤務	・以前の給与は\$150であったが、今は\$300
美容	・工場勤務	・平日は工場勤務、週末は美容店開業で50%の収入アップ
美容	・工場勤務	・平時は月\$500の収入、繁忙期は月\$800の収入
バイク修理	・バイクタクシー	・現在\$150の収入、以前のバイクタクシーでは\$70。

■カンボジア・日本国際福祉事業団「貧困家庭の子どものための給食付き識字教室の運営及びスタッフの研修」

プノンペンに住む貧困層にある子どもたちに給食付き識字教室(日本語名「にこにこの家」)を無料で実施し、母国語であるクメール語や英語、日本語等、生きるために必要な知識を身につけさせ、現在、公立学校に通っていない生徒は、可能であれば学校に戻れるよう支援している。

○事業が日本からの支援であることの認知度

本校が日本からの支援であることについては、インタビューした生徒34名のうち28名(82.4%)が「知っている」と回答した。一方、親については10名のうち9名(90.0%)が「知っている」と

回答した。親は近所に住む他人から本校が日本からの支援であることを聞いた場合の他、子どもから、本校が日本からの支援であることを聞いており、背景には、授業の中で教師等が生徒に対して説明がなされていることがある。

○サービスの内容、質に対する評価

授業は楽しいかと尋ねたところ、全ての生徒が「楽しい」と回答した、また、どのようなところが楽しいのかと尋ねたところ、にこにこの家での勉強、友人との遊びがともに楽しい理由になっており、生徒はすすんで学校に通っている状況が確認できる。また、授業内容では、国語、英語の人气が高く、日本語を好きな科目と回答する生徒もいた。給食については、インタビューした全ての生徒が「おいしい」と答え、生徒において、それぞれ好きなもの、楽しみにしているメニューがあり、給食の時間も生徒の楽しみになっていることが確認された。

○生活の変化状況、役立ち度

にこにこの家に通ったことでの生活の変化状況や役立ち度について尋ねたところ、子どもは学校に通うことで、以前より勉強ができるようになったことや、楽しい時間が得られるようになったこと、さらには食事がきちんと取れるようになったこと、が役立ち度の内容として指摘された。一方、親も子どもが無償で学校に通い、食事が与えられることで、教育費、食費の負担が大きく軽減され、役に立っていることが確認された。

図表 にこにこの家に通う子ども



(生徒へのインタビュー)

- ・以前より勉強ができるようになった。食事もここで取れて家計も助かっている。読み、書きがちゃんとできるようになった。
- ・以前より良くなった。朝と昼がちゃんと食べられる。読み、書きができるようになった。
- ・仕事をしなくてよくなり楽になった。以前より御飯をちゃんと食べられるようになった。
- ・以前よりも勉強ができるようになり他のことをしなくて良いので楽。
- ・以前は一食だったが今は二食食べられる。こづかいも不要になった。文房具ももらえる。

■ミャンマー・ジャパンハート「住民のための診療・手術及び医療従事者への技術指導」

開発途上国であるミャンマーの近年の発展は著しいものの、地方ではまだまだ十分な医療を受けられない状況にあり、医師や看護師不足が深刻である。本事業は、ワッチャ慈善病院において、定期的に日本から医師・看護師を派遣し、約 8,000 名の外来診療と約 1,200 件の手術を行うとともに、手術に必要な超音波機器を配備。また、現地医師、看護師と共に医療活動を実施し、医療知識、技術の指導を行うこととした。

○事業が日本からの支援であることの認知度

本校が日本からの支援であることについては、インタビューした手術前後の患者 26 名のうち 25 名(96.2%)が「知っている」と回答し、1 名(3.8%)が「知らない」と回答した。本病院は、特別の宣伝や広報を実施せず、口コミで日本人医師による高度の医療と医療費の安さに関する認知が高まっており、来院する前から多くの患者が日本からの支援であるということが知られているようである。また、本病院が日本からの支援で運営されていることを知り、患者及び家族は親日的な感情が醸成されていることも確認できた。

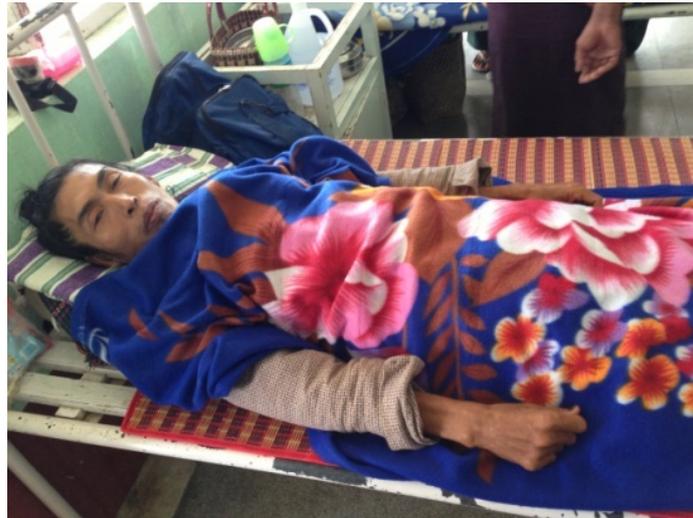
○サービスの内容、質に対する評価

手術前の患者に、本病院の医療の内容、質に対する期待について尋ねたところ、日本人医師による高度な技術による治療が受けられることから、多くの患者がその内容、水準を期待し、また治癒できることを期待していることが確認できた。また、本病院の紹介を受けた、以前に入院していた患者の状況から、自らの病気も治癒できるものとの期待も医療の内容、質に対する評価につながっている。日本人医師によると、「以前は日本から来る医師は若手が多かったが、今は指導医レベルの医師も参加している。日本の地方の病院よりは高い水準の医療が提供できていると思う」とのことであった。また、病院の環境についても清潔で広く、患者にとって快適な環境であることが高く評価されている。医師、看護師等の医療スタッフの対応も親切で、そのことが手術を受ける前の患者にとっての安心につながっている。

○現地の医療の内容、質に対する評価(現地医療関係者の声)

医師によると定期的に訪れる日本人医師の指導の下で数多くの手術を経験して、ミャンマー人医師の技術、能力は大きく向上している。また、提供された高度の医療機器を活用して、より高水準の医療が提供されるようになったと評価している。ミャンマーでは、医師は資格に応じて実施できる手術の内容、水準が特定されているが、日本人医師の下では、そのような規制もなく、より高度の手術を経験することができる等、ミャンマー人医師の医療技術の向上に貢献している。

図表 手術後の患者



■裨益者調査のまとめ

①裨益者にとっての恩恵、役立ち度

各事業ともに背景となる課題が異なるものの、いずれの事業においても裨益者にとっての恩恵となり、生活の改善、向上に取って役立つものとなっている。

事業名	恩恵、役立ち度の内容
カンボジア・アジア・レインボー「貧困労働者のための職業訓練校の運営」	<ul style="list-style-type: none"> ・技能、知識の習得による職業的自立と生活の改善 ・仕事をしながらの技能の習得 ・貧困層の労働者でも支払える安い授業料
カンボジア・日本国際福祉事業団「貧困家庭の子どものための給食付き識字教室の運営及びスタッフの研修」	<ul style="list-style-type: none"> ・能力に応じた学習の提供 ・無料の食事の提供
ミャンマー・ジャパンハート「住民のための診療・手術及び医療従事者への技術指導」	<ul style="list-style-type: none"> ・高度な医療サービスの提供 ・安価な医療費

②親日的な感情の醸成

国際ボランティア貯金の裨益者の多くは、国際ボランティア貯金制度そのものの認知度は低いものの、支援が日本のものであることを知っており、ほぼ全ての裨益者がそれに対する感謝や礼を示していた。援助事業により裨益者の多くは親日的な感情が高まっていることが確認された。

③成功要因

各事例に共通する成功要因として、「料金の安さ」「質の高い運営」「信頼できる現地パートナー」の3点があげられる。

2. 平成 23 年度配分事業の評価

■22 団体に配分、実施プロセスは適切と評価

平成 23 年度における配分実績は、22 団体・22 事業に対して全体で 1 億 1,291 万 5 千円であった。地域別にみるとアジアが最も多く、7,132 万 4 千円、続いてアフリカが 3,138 万円、中近東が 1,021 万 1 千円であった。

図表 平成 23 年度の国際ボランティア貯金の配分実績

区別	平成 23 年度	(参考) 平成 22 年度
申請団体数	25 団体	42 団体
申請事業数	25 事業	42 事業
申請金額	約 1.5 億円	約 2.5 億円
申請事業実施国数	15 か国	20 か国
配分団体数	22 団体	33 団体
配分事業数	22 事業	33 事業
配分金額	11,291 万円	14,583 万円

(出典)総務省

平成 23 年度配分対象となった事業の形態及び分野についてアンケート調査を通じて尋ねたところ、形態では「技術協力・技術指導と施設の設置・設備の設置の混合」が最も多く、45.5%であった。続いて、「技術協力・技術指導」が 36.4%であった。また、分野については、「保健・衛生」が最も多く、40.9%。続いて「教育」が 31.8%であった。

平成 23 年度配分事業の実施プロセスは、審査プロセス、事業管理、監査プロセスともに特段の問題なく、実施プロセスは適当であったと評価できた。

■DAC の 5 項目基準による評価ではいずれも結果は良好

昨年度に実施したアンケート調査をベースにして、平成 23 年度に配分を受けた 22 事業の団体に対して書面形式でのアンケート調査を実施し、事業の成果について、妥当性、効率性、有効性、インパクト、持続性の各観点からの評価を行ったところ、いずれも高い評価結果を得られた。

3. 国際ボランティア貯金制度の有効性評価

本制度の成果については、平成 24 年度調査研究において、以下の点が確認されている。

- ① 特に制度創設期には国際ボランティア NGO 団体の活動、育成に大きく貢献
- ② 多くの事業において課題が解決され、成果の実現に貢献、日本に対する好感も醸成
- ③ 我が国 ODA では行き渡らない国・地域への支援に大きく寄与
- ④ 広く国民におけるボランティア意識の普及・啓発にも貢献

本年度に実施した裨益者調査による評価、実績及びプロセスの評価、アンケート調査による評価、いずれにおいても高い成果が確認されていること等も踏まえると、国際ボランティア貯金制度は有効な制度であったと評価できる。